

むらぎも

緒方茂夫

湯の町

乏しらの湯音静けし仰向けは窓越しのはては星の空かも
湯の宿にひと夜眠ればをりを枕に遠く水の音きこゆ
旅こよひねつきがたきを枕がみかけひこぼる水の音かも
ねしづまる町のまなかを反古一つころがり行くもあはれ月夜を
船出すと瀆におらべる海夫の聲聞近くきこゆ朝雨はれて

阿蘇

天そゝる幾山脈を垣にせる千里が濱に風吹き渡る

長崎

しめらひのしみらに寒し天主堂サンタ・マリヤの寢息のけはひ
太笛のこだまは長し秋まひるオランダ坂をわれ下りにけり

籠居

籠居の庭冬さひし枝のはに尾をふる鳥のしまらく居るも
ひむがしの大阿蘇が嶺に渡る雲噴煙かくしてひと日動かす
澄澗と加留多に勇みし背ながらせんすべもなく雨音をきゝあり

春を迎ふ

村の兒の早蕨持ちて走り越す谿ぞひの路春はれにけり
初春の陽のうらうらと光るなか白梅かざして馬の行くあり
いささめの山の歩きに疲れ來て春定れる陽を浴みてをり

子等學びに來て

家めぐる寒さを思ひこの夜更け歸り行く子をあはれみにけり
冴えかへる霜夜の道を歸り行く子等を思ひて燈を消しにけり
子等二人いまは家に着きなんと心やすめて眼を閉ぢにけり